

日本のポンペイ

～ 渋川市の遺跡を探る ～

No. 2

『黒井峯遺跡』

黒井峯遺跡が世に知られるようになったのは、昭和61年元旦の新聞記事がきっかけでした。

記事は社会面トップ、全国版扱いで、タイトルは「6世紀の農村“完全遺構”登呂遺跡に匹敵する大発見」と付けられ、見学者数は3月までの3カ月間で1万3000人に達するなど、大きな話題となりました。

遺跡は、1490年前前の古墳時代に、榛名山の2度目の火山爆発によって軽石で埋没した災害遺跡で、村の広さはおよそ14万平方メートル、場所は現在の子持中学校とその周辺に存在し、国指定史跡となっています。

昭和57年に初めて発見された後、本格的な調査が翌年から平成元年まで続き、特に昭和60年以降に被災集落の実態が明らかになっていきました。集落の家屋は約47棟あり、屋根は軽石で陥没し、壁は大きく歪んでいます。家屋のまとまりのうち、最小のものは竪穴建物1棟と平地建物2棟（住居と作業小屋）で広めの庭があり、最大のもは竪穴建物1棟と平地建物14棟（住居、作業小屋、高床倉庫、家畜小屋）が混在し、全体が垣で大きく囲われています。こうしたまとまりが遺跡全体で10程度あったと推定されています。家畜については、集落がなかった白井、吹屋で馬の足跡が確認され、馬の放牧地であったことが分かりました。

このことから、馬の飼育・繁殖という当時の最先端技術を手掛けていた集落の存在が、黒井峯遺跡の特色となっています。

（渋川市文化財調査委員 石井 克己）



遺跡調査の様子